

個が描く絵画から生み出される人とのつながり——

平成26年度島田市芸術文化奨励賞を受賞された山城道也さんは、二紀展入選のほか、数々の受賞歴を持っています。また、子どもたちの絵画教室や金谷宿大学などの生涯学習講座の講師を務めるなど、市の文化芸術向上に貢献しています。

【絵の魅力を知る】

「子どもの頃から絵は嫌いではなかったんです」と語り出した山城さんは、特別芸術に囲まれた環境下に育ったわけではないと言います。「絵画教室にも通わなかったし、ずっと絵を描いている子でもなかったですね」

そんな山城さんが、初めて自分の絵の力に驚いたのは小学生のとき。授業で書いた絵が、海を渡り、海外で紹介されたそうです。「知らないうちに外国で披露されてビックリ。思い返せば、絵は世界の共通語だということを教えてくれた



一幕でした」

その後、金谷高校に進学して美術部に入部。そこで知った油絵の持つ「表現力の自由さと奥深さ」に魅了され、美術デザイン科の大学に進学して多くを学びました。



絵画の魅力を伝え広める若手画家
やましるみちや
山城道也さん（金谷金山町）

る厳しさや本物を追求する高い意識といった姿勢、全てに影響を受けたんです。あの時、先生の背中を追いかけたことが、本気で絵にのめり込むきっかけになりました」と熱く語ります。その後、山城

【恩師の姿勢にほれ込む】

大学で絵を教えてくれたのは、二紀会を中心に活躍する、恩師佐々木信平氏。「私は一目で先生の作品にほれました。描写の技術や力強い表現力はもちろん、絵画に対す

さんは、恩師の勧めで学生のうちに二紀展に出展。初入選を果たし、絵を描き続ける決意を固めました。

【大切なこと】

「家内の支えがあって、初

めて私は絵に打ち込めます。なかなか口には出せませんが、彼女がいてくれて良かったと、心から思っています」

シルバーアクセサリー制作をしていた奥さんも、芸術家の仕事を理解しています。とはいえ、アトリエにこもって不規則な生活をする夫を支えられていられるのは、深い愛情がなければできません。

39歳にして30回以上の個展を開く山城さんは、訪れる人から多くの気付きを得ます。「絵に限らず、芸術・文化の世界では、辞めて行く人が多くいます。環境に恵まれてこの世界にとどまることができた私ですが、今は続けることが大切だと実感しています。長く続け多くの人に作品を見てもらえば、『人とのつながり』が生まれ、その人たちの声が、学びのチャンスにもなるからです」と話す山城さん。「絵を描く時は個人でも本当はその先にいる多くの鑑賞者が一番大切。それを意識して絵を描くように、子どもたちや受講生の皆さんに伝えていきたいです」と、力を込めて語ってくれました。

「大切なこと」



丁寧に作品を仕上げる

Shimadian File #54

